

令和7年度 三重大学修学達成度評価
－三重大学生の4つの力に関するアンケート調査－
＜結果の概要＞

1. 調査の概要

1.1 目的

三重大大学の学位授与方針となっている「4つの力（※）」に対する学生の自己認識の現状を把握し、今後の三重大大学における教育展開のための基礎資料とする。

※4つの力とその構成要素

（令和6年度以降の入学生対象）

- 1. 感じる力：感性、共感、心身の自覚
- 2. 考える力：専門知識・技術、教養、論理的・批判的思考力
- 3. コミュニケーション力：発表・討論・対話力、リーダーシップ・フォロワーシップ、異文化理解・異文化コミュニケーション
- 4. 行動する力：社会の一員としての態度・倫理観、主体性、問題発見・解決力

（令和5年度以前の入学生対象）

- 1. 感じる力：感性、共感、主体性
- 2. 考える力：幅広い教養、専門知識・技術、論理的・批判的思考力
- 3. コミュニケーション力：表現力(発表・討論・対話)、リーダーシップ・フォロワーシップ、実践外国語力
- 4. 生きる力：問題発見・解決力、心身の健康に対する意識、社会人としての態度・倫理観

1.2 調査の設計

アンケート1（春）

- (1) 調査対象 令和7年度新入学生
- (2) 対象者数 1,381名
- (3) 対象者選択法 全数調査
- (4) 調査方法 三重大大学ウェブ調査システム
- (5) 調査時期 令和7年4月～令和7年5月

アンケート2（秋）

- (1) 調査対象 三重大大学に在籍する学部生
- (2) 対象者数 5,986名
- (3) 対象者選択法 全数調査
- (4) 調査方法 三重大大学ウェブ調査システム
- (5) 調査時期 令和7年9月

1.3 調査内容（アンケート1・2共通）

- (1) 4つの力とその構成要素について、自己が達成したと思う項目を選択（60（12×5）項目）。
- (2) 4つの力について、身につけることが大切だと思う程度を「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらともいえない」「そう思う」「非常にそう思う」の5段階で回答（4項目）。

2. 分析対象者数

アンケート1：765名、アンケート2：4,609名（内訳は以下の表のとおり）

			人文	教育	医	工	生物資源	合計	
（春）	アンケート1	学生数	1年生	259	200	207	444	271	1,381
		回答数		131	106	145	211	172	765
		回答率		50.6%	53.0%	70.0%	47.5%	63.5%	55.4%
（秋）	アンケート2	学生数		1,096	829	1,084	1,856	1,121	5,986
		回答数	1年生	248	189	202	424	263	1,326
			2年生	238	203	105	380	259	1,185
			3年生	229	196	79	399	247	1,150
			4年生	153	183	86	308	205	935
			5.6年生			13			13
		合計		868	771	485	1,511	974	4,609
		回答率		79.2%	93.0%	44.7%	81.4%	86.9%	77.0%

3. 結果の概要－「4つの力」の修得に関する学生の自己認識－

- 本調査では、「4つの力」に関して学生がどの程度修得できていると自己認識しているかを把握した。その結果、学生の修得実感は総じて高く、学年が上がるにつれて修得実感が高まる傾向が見られた。
- 以下では、調査結果のうち、学生の修得実感の高低や学年による伸び幅に着目し、以下の①から⑦の項目に関する結果のみを抜粋して示す。
 - ①「社会の一員としての態度・倫理観」
 - ②「感性」
 - ③「共感」
 - ④「論理的・批判的思考力」
 - ⑤「教養」
 - ⑥「専門知識・技術」
 - ⑦「異文化理解・異文化コミュニケーション／実践外国語力」

【留意点】

- 令和6年度以降の入学者と令和5年度以前の入学者とでは「4つの力」の定義が異なるため、学年間の比較は内容が近い項目同士を対応させた大まかな比較にとどまっている。
- 5・6年生のデータは医学部医学科の学生のみを対象としており、母集団の規模や属性が他学年と大きく異なる。そのため、5・6年生のデータを他学年と比較することは適切ではなく、以下に示す他学年との比較に関する記述には、5・6年生を含めていない。
- 以下の表に示す数値は、各項目に対する学生の選択率、つまり、学生がどの程度「4つの力」を修得できていると自己認識しているかを示すものである。したがって、経時的な変化（成長）を表すものではない。
- 以下の表では、視覚的に分かりやすくするため、選択率を次のとおり色分けして示している。

30%～	40%～	50%～	60%～	70%～	80%～	90%～
------	------	------	------	------	------	------

①「社会の一員としての態度・倫理観」

社会の一員としての態度・倫理観	社会の一員としての態度・倫理観（行動する力）		1年・春	1年・秋	2年・秋
	三重大学及び社会の一員として、マナーをふまえた行動をすることができる		97.0%	96.3%	96.8%
	与えられた任務を責任感と当事者意識を持って遂行することができる		94.2%	93.0%	92.7%
	場や状況を適切に判断し、行動することができる		89.7%	90.7%	92.9%
	自らの欲求や周囲に流されることなく、倫理的な基準をふまえた判断や決定ができる		78.0%	85.1%	88.5%
	学修活動や研究における倫理的・法的基準に関する知識を持ち、判断し守ることができる		82.6%	89.1%	92.0%
	社会人としての態度・倫理観（生きる力）		3年・秋	4年・秋	5.6年・秋
	三重大学及び社会の一員として、マナーをふまえた行動をすることができる		94.2%	94.9%	92.3%
	与えられた任務を責任感と当事者意識を持って遂行することができる		92.9%	93.3%	84.6%
	場や状況に応じて適切な振る舞いをその都度考え、選択することができる		92.1%	94.5%	92.3%
感性	自らの欲求や周囲に流されることなく、倫理的な基準をふまえた判断や自己決定ができる		88.0%	91.8%	76.9%
	専門領域における倫理的・法的基準に関する知識を持ち、判断し守ることができる		90.1%	93.4%	84.6%

本項目は全体として高い選択率を示しており、とりわけマナーに関する項目は全学年で90%を上回っていた。一方、倫理的判断や法的基準に関する項目は、低年次では相対的に低いものの、学年進行に伴って選択率が高くなる傾向が見られる。したがって、倫理的判断力については大学での学修を通じて修得実感が向上した可能性が示唆される。

②「感性」

感性	感性（感じる力）		1年・春	1年・秋	2年・秋
	考えたことだけではなく、感じ取ったことも大切にしている		97.0%	98.0%	97.4%
	相手が感じていることを同じように感じ取ることができる		75.3%	81.5%	87.3%
	文章や作品などで表現をする際に、自らの感性を意識して行うことができる		78.2%	84.3%	87.3%
	学習の振り返りにおいて、獲得した知識だけではなく、学びの過程で伴う感情についても意識することができる		74.1%	84.8%	85.7%
	多様な文化や価値観との出会い、または人との関わりを通して、自らの感性を磨こうとしている		86.3%	89.5%	89.9%
	感性（感じる力）		3年・秋	4年・秋	5.6年秋
	考えたことだけではなく、感じ取ったことも大切にしている		95.9%	96.3%	92.3%
	相手が感じていることを同じように感じ取ることができる		90.9%	91.1%	92.3%
	文章や作品などで表現をする際に、自らの感性を意識して行うことができる		89.8%	90.3%	92.3%
性	学習の振り返りにおいて、獲得した知識だけではなく、感性の観点も意識することができる		87.2%	88.7%	84.6%
	自らの感性がどのようなものかを意識することができる		87.7%	88.8%	84.6%

「感じ取ったことを大切にする」意識が全学年で高く示された。また、他者の感情を捉える力や、学修過程に伴う感情を意識する力については、学年進行に伴って選択率が高くなる傾向が見られる。これらの結果から、感性に関する修得実感が、他者理解や自己省察に関する自己認識とともに高まっている可能性が示唆される。

③「共感」

共 感	共感（感じる力）		1年・春	1年・秋	2年・秋
	自分の考え・意見との相違にかかわらず、他者の意見・考えがなぜそれに至ったかをその人の立場に立って理解することができる		86.5%	88.1%	90.6%
	他者がおかれている状況を想像しながら相手の話を受け止め、共感的態度を示すことができる		94.5%	92.8%	92.2%
	他者の考えをくみとり、他者が行動しやすいように支援することができる		85.5%	85.9%	88.7%
	身の周りの共感できる出来事や変化に敏感に気づくことができる		76.9%	81.9%	86.0%
	社会の中で困っている人のことに思いをはせて、自分に関連づけて考えることができる		75.3%	78.7%	84.2%
	共感（感じる力）		3年・秋	4年・秋	5.6年・秋
	自分の考え・意見との相違にかかわらず、他者の意見・考えがなぜそれに至ったかをその人の立場に立って理解することができる		90.2%	91.9%	84.6%
	他者がおかれている状況を想像しながら相手の話を受け止め、共感的態度を示すことができる		93.8%	95.4%	92.3%
	他者の考えをくみとり、他者が行動しやすいように支援を行う		90.1%	91.7%	84.6%
	共感すべき対象や事柄が周囲にあるとき、それに敏感に気づくことができる		88.1%	88.7%	84.6%
	社会の中で困っている人のことに思いをはせて、自分に関連づけて考えることができる		84.8%	87.0%	84.6%

総じて初年次から高い選択率を示しており、学生は他者の状況を想像しながら話を受け止める態度について、高い修得実感を有している。一方、身近な出来事や社会的課題に気づき、それを自己と関連づけて捉える項目については、学年進行に伴い選択率が高くなっている。このことから、共感に関する自己認識は、対人的態度に加え、社会的文脈への関心にも広がっている可能性がある。

④「論理的・批判的思考力」

論 理 的 ・ 批 判 的 思 考 力	論理的・批判的思考力（考える力）		1年・春	1年・秋	2年・秋
	論理的であるかどうかという観点から物事を考えることができる		76.1%	86.3%	87.1%
	分かりやすく表現するために、物事を論理的に組み立てることができる		68.1%	78.1%	82.0%
	自らが主張を行う際、その根拠として適切な客観的事実を示すことができる		75.2%	82.7%	84.9%
	自分が考えたことや思考過程についても、批判的に捉えようとするすることができる		77.5%	84.5%	84.7%
	自身で調べた様々な事実から物事を客観的に判断できる		81.7%	84.7%	87.4%
	論理的・批判的思考力（考える力）		3年・秋	4年・秋	5.6年・秋
	論理的であるかどうかという観点から物事を判断することができる		87.7%	90.6%	84.6%
	物事を分かりやすく順序立てて説明することができる		78.3%	82.4%	69.2%
	自らが主張を行う際、その根拠として適切な客観的事実を示すことができる		85.7%	87.7%	84.6%
	自分が考えたことや思考過程について、それで良いのかを問うことができる		90.3%	91.4%	84.6%
	多様な観点から考えの善し悪しを判断できる		89.2%	91.1%	76.9%

学年進行に伴い、多くの項目で選択率が高くなっている。特に、論理的に考えることや、物事を順序立てて表現することについて、学生の修得実感が高くなる傾向が認められる。一方、分かりやすく説明する力に関する項目は、他の項目と比較して相対的に低い水準にある。

⑤「教養」

教 養	教養（考える力）		1年・春	1年・秋	2年・秋
	学問に分野による優劣はなく、どの学問も重要であるという敬意を持っている		88.5%	91.0%	92.7%
	自分の専門分野以外についても、興味関心を持って知識や技能を得ようとしている		84.3%	87.3%	87.3%
	自分の専門と他の学問との関わりについて説明することができる		44.8%	60.5%	67.6%
	社会の一員として必要とされる教養について知っていて、それを磨こうとしている		74.2%	81.5%	85.7%
	ニュース・新聞などを使って時事問題についての関心を広げている		59.1%	68.2%	70.9%
	幅広い教養（考える力）		3年・秋	4年・秋	5.6年秋
	学問に分野による優劣はなく、どの学問も重要であるという敬意を持っている		91.5%	92.3%	92.3%
	自分の専門分野以外についても、興味関心を持って知識や技能を得ようとしている		83.4%	85.9%	84.6%
	自分の専門と他の学問との関わりについて説明することができる		72.1%	77.6%	69.2%
	社会の一員として必要とされる教養について知っていて、それを磨こうとしている		86.1%	88.4%	84.6%
	ニュース・新聞などを使って時事問題についての関心を広げている		73.4%	77.4%	84.6%

学問への敬意や専門外の分野への関心について、入学時点から比較的高い選択率が示されている。一方、自身の専門分野と他分野との関連を説明することや、時事問題への関心を広げることについては、学年進行に伴って選択率が高くなる傾向が見られる。したがって、教養に関しては、専門性や社会的課題との関連づけを通じて修得実感が高まっている可能性がある。

⑥「専門知識・技術」

専門知識・技術

専門知識・技術（考える力）	1年・春	1年・秋	2年・秋
授業を通して専門領域の基本的な概念やスキルを習得した	55.4%	89.7%	94.2%
授業以外で、継続的に専門的知識・技術を手に入れる習慣ができています	38.3%	56.1%	65.9%
専門領域の中で自分の研究テーマ（追求したいテーマ）が定まっている	39.1%	52.9%	57.7%
自分の専門について、知らない人にわかりやすく説明ができる	31.0%	50.2%	59.7%
専門的知識や技術を使って、同じ専門の人とやりとりができる	30.8%	48.9%	58.0%
専門知識・技術（考える力）	3年・秋	4年・秋	5.6年秋
授業を通して専門領域の基本的な概念やスキル、技能を習得した	92.7%	92.8%	84.6%
授業以外で、定期的に専門的知識・技能を手に入れる習慣ができています	67.3%	76.5%	61.5%
専門領域の中で自分の研究テーマ（追求したいテーマ）が定まっている	67.1%	89.0%	53.8%
自分の専門について、知らない人にわかりやすく説明ができる	69.4%	80.6%	69.2%
専門的知識や技術を使って、同じ専門の人とやりとりができる	66.6%	72.9%	76.9%

専門知識・技術に関する項目では、学年進行に伴う選択率の上昇が比較的明確に見られる。授業を通じた専門的基礎の修得に加え、研究テーマの明確化や、専門内容を他者に説明することについて、学生の修得実感が高まっていることがうかがえる。一方、授業外で継続的に専門知識を獲得する習慣については、他の関連項目と比較して相対的に低い水準にある。自律的な専門知識・技術の獲得に対する自己認識を高めることが、今後の課題として示唆される。

⑦「異文化理解・異文化コミュニケーション／実践外国語力」

異文化理解・コミュニケーション／実践外国語

異文化理解・異文化コミュニケーション（コミュニケーション力）	1年・春	1年・秋	2年・秋
日頃から語学力の向上に取り組んでいる	53.1%	63.9%	61.7%
外国語で表現された一般的な情報や専門分野に関わる必要な情報を入手することができる	44.7%	59.7%	62.0%
異なる言語や文化との共通点・相違点を理解し受け入れることができる	85.4%	86.9%	86.0%
異なる社会的・文化的背景を持つ相手に配慮しながら、外国語で会話をする事ができる	36.9%	54.1%	56.6%
文化や言語の異なる相手と、相互理解に至るまで意思疎通を継続することができる	47.3%	58.1%	60.9%
実践外国語力（コミュニケーション力）	3年・秋	4年・秋	5.6年秋
外国語で表現された専門分野に関わる必要な情報を手に入れることができる	50.7%	61.0%	46.2%
外国語で表現された一般的な情報を手に入れることができる	65.2%	74.2%	69.2%
外国語で日常生活に関する会話をすることができる	52.4%	55.9%	38.5%
TOEICで600点以上である	49.8%	58.3%	69.2%
外国語だけで話す生活体験を1日以上している	42.2%	47.3%	46.2%

本項目では、異文化を理解し受容する態度について、比較的高い選択率が示されている。一方、外国語を用いた会話や情報収集など、実践的な外国語運用に関する項目は、他の項目と比較して低い水準にある。例えば、外国語による情報収集に関しては、専門分野に関わる情報の収集の方が、一般的な情報の収集よりも選択率が低い。したがって、学生は異文化理解に関する態度面では一定の肯定的な自己認識を有しているものの、外国語を実際に用いる場面については、修得実感が十分に高まっていないと考えられる。今後は、外国語を実際に使用する学修機会の充実が求められる。

まとめ

- 本調査では、「4つの力」に関して学生がどの程度修得できていると自己認識しているかを把握した。その結果、学年が上がるにつれて修得実感が高まる傾向が見られた。
- 修得実感が最も高かったのは、「社会の一員としての態度・倫理観」（①）、「感性」（②）、「共感」（③）である。これらの項目は、全学年で選択率が高かった。
- また、「論理的・批判的思考力」（④）、「教養」（⑤）、「専門知識・技術」（⑥）といった大学教育を通じて育まれる力は、学年進行とともに着実に修得が実感されている。
- 一方、外国語運用に関する項目（⑦）では、学生の修得実感が低い水準にとどまっている。
- 以上のように、本学学生の成長の特徴と弱みが示される結果となった。